

地球第十二卷第六號

昭和四年十二月一日

戰爭の地理學的考察 (五)

(附 圖版第六版)

小 川 琢 治

一

戰爭に於ける地形の利用の巧拙はその勝敗に決定的關係があることは既に述べた所から頗る明瞭である。人文地理學の立脚點から或る地域に於ける都邑の興廢盛衰を論ずるに當つても、亦た常に此の視點に着眼せねばその眞義を誤解するに至る危険がある。之を換言すれば大都市發達の第一の要因として廣大なる地域に對して戰爭上に都合の良い位置を占めることに注意せねばならぬのである。此の選擇を誤るか又は時代の變遷により最初選定された時に重要であつた戰略上の意義が失はれるかにより往々にして一たび榮えた都邑が衰滅する運命に遭遇するも亦た免れ難き數である。特に時代の經過に従ひ都邑遷移の必要となるのは歷史上に屢見る所で、その理由には種々あつて、地形の變化もあり、交通機關の發達もあり、地域の擴大又は敵國の壓迫及び防禦線の移動の如き政治及び軍事上の關係もある譯で、單なる時間の經過により生ずるものでないのは勿論である。故に此等細目に涉つて考察して始めて人文地理學に於ける戰略學的意義が正當に了解される。

而して此の問題に入るに當り先づ考慮せねばならぬことは與られたる地域に於ける某地點の地理的位置（幾何學に定まつた位置）の不變性であつて、之を大にしては一國の首府として定められた地點とその國境との間の位置の關係即ち首府から國境までの距離の場合に見ることが出来る。國境が山川の如き固定した地物により決定されてゐるとすれば、之に對する距離は一定不變にして、地圖に就いて之を觀ればその相互の位置に變化がない。戰略上からは此の不變性は必しも絶對的でなくて交通機關の發達に伴ひ距離が短縮したと同じ變化を被むるのは勿論なるも、それでも若し鐵道による迅速交通線が首府を中心として放射狀に敷設されたらば國境に達するに要する時間は矢張りその距離に比例すべきで、中心と周邊との關係の變化はその前後に於いて相似形に近い形狀を成すに止るべきである。

是よりも重大なる變化は山川の地形上の變化で、就中冲積平野を流るゝ河道の變遷が著しく、此の地文的變化の政治及び軍事上に及ぼす影響の中に於いて國境の移動が特に注意に値する。内地にその例を求むれば筑後川の下流及び河口に起つた河道の變遷はこの事實を明示するもので、その蛇行する頃に決定された國境は洪水の氾濫により屢々起る現象たる直行により勾玉狀の肥前筑後兩國の飛地を新河道の外部に生ずることゝなつてゐる。最近に計畫された筑後川改修の工事が完了すれば、更に此の如き飛地が出来る。此の如き河道外の領地が藩政時代には佐賀、久留米兩藩の所領の間に横る頗る厄介な問題であつたのは怪むに足らぬ。

河道の變化に因る戰略地理學的關係の變化の最も好い例は關東平野に見られる。利根川の現在の流路は天正十八年徳川氏の江戸入府以來に人工により附け變へが行はれて出來たものである。吉田（東伍）博士に従へばその以前には利根川の幹流は略ぼ今の江戸川の河道に沿ひ南流して東京灣に注いだもので、渡良瀬川も亦た略ぼ之と竝走して南流したらしい。その精密なる位置は多少不明なるも、武藏・下總國境を劃するものであつた。即ち現在の如く關東平野を南北に二分する代りに、少くもその南半を更に東西に二分するものであつて、今河北に在る結城北相馬二郡は當時は河東に下總の他郡に續いた位置を占めてゐた。此の位置たるや、當時兩郡は北は白河の關を経て奥羽に通じ西は兩毛を経て碓氷清水の兩峠を越え信濃越後に通じ、東は常陸濱街道、勿來の關を経て磐城陸奥に通じ、南は兩總と安房を扣へてゐるから、關八州の中の六國を控制することが出來るといふ形勝を成してゐた譯である。

此の鬼怒川と利根川の河間平地の戰略上の意義は天慶の亂に平將門の根據地となつた時に初めて現はれた。大森（金五郎）文學士に従へば將門記といふ文書は亂後數月を出でざる際の記錄にして根本資料として最も珍とすべきもので、此の書に據れば將門の據つた石井營所いゐのは今の岩井町附近に在り、その生れた所は豊田郡今の結城郡の中の鬼怒川の東側であつたといふ。即ち將門は鬼怒川を渡つて此の河間平地に進出したもので、俗説相馬内裏といふものはこの岩井町附近に計畫された關東一圓の首府であつて、未だ野心を實現するに至らずして、平貞盛藤原秀郷等の襲撃に遭ひ、一敗直ちに戰死したのである。

岩井附近の地形の千年間に被つた變化は前に述べた利根川の流路の附け變へが最も著しきも、林野沼澤の開墾の進行による景觀の變化も頗る著しく、明治年間に實測した陸地測量部の地形圖を現狀に比較して變化した所が既に多大なる驚くばかりである。残存する地物から之を推測するに、關東平野の中今の利根川以北に在る兩毛常陸及び下總北部の地方は臺地に松杉榎樅等の樹木と竹藪とが多くして、その間の沼澤地には蘆葦叢生し、田畑屋廬の散在する狀態は今日と雖も稀薄なる處があるが、當時は更に互に離れ、將門と之に對抗したものの軍隊の出沒に適し、地理に通曉したものが朝がけ夜討ちの奇襲を試むることは頗る自由なりしを想像し得る。

幸島(猿島)郡岩井町は鬼怒川に沿ふた水海道(みづみち)の西に在つて、その間に營生沼の低濕地が北に深く入り込み、その西に鵜戸沼長井沼(將門記の葦津沼)等が西北に延長し、その大部干拓された今日に比すれば當時は侵入者に不利で、立て籠るものには守備に便なる地形を成した筈である。

將門記に貞盛秀郷等の四千餘人の兵を整へて戰はんとするを聞き、將門天慶四年二月一日下野に向ひ、その前陣未だ敵の所在を知らず、後陣の玄茂等敵の所在を訪ひ得て、實否を見んがため高山の頂に登り遙かに北方を見れば敵ありといひ、高山といふのは誇張の語にして唯高處を指すに過ぎざるべきも、その敗るゝに及び地理に暗きものゝ逃げ迷ふ狀を記したると共に當時の林野の錯雜した形相を察するに餘りある。

下野常陸下總三國の交界地には此と同じ低濕なる沼澤頗る多く、水海道(みづみち)の北二〇軒の大寶沼の如きも、今は大部分干拓して水田となつてゐるが、之に臨んだ關館は關宗祐の居邑にして北畠親房關

東下向の時に之を援護して關城に立て籠り、その南の大寶城と雙んで關東の南朝方を收合し、高師冬等の大軍に對抗すること四年に亘つた處である。

下總國西北界に近い結城古河の兩地も亦た此の河間平地に於ける要地であつた。室町時代に降つて足利持氏の上杉憲實に迫られて鎌倉に自殺した後に結城氏朝の持氏の二孤を擁して據つた結城城は今の結城町の市街の東北に在つて、鬼怒川田川の兩水左右を流れ、舊記に天然形勝の地要害の便ありといふ處であり、又た思淵に臨んだ小山は古國府の所在地に近く、下野國守の實力の衰へた後には小山朝政の子孫の割據する所となり、古城址は渡良瀬川の左岸に在つて、周圍の遠近に沼澤の多い低濕の土地に小高くなつた丘阜に築城し、足利成氏の鎌倉を落ちて後四世間屋形を立て關東北半の諸豪族を背景として管領上杉氏に對峙した。

此等の諸地點の戰略上關東平野に對して有した意義は江戸成立以後利根川の東流するに及んで少くもその半を失ひ、舊利根川の東岸に在つて北條氏綱の關東占有の決勝戰の行はれた國府臺の如きも亦た武總國境に於ける形勝の位置の意義が殆んど全く失せた。

一四

黃河の大平野に流れ出た後に下部の幹支流の有史以來に變化したのは歴史地理上顯著なる事件の一である。その太行山地の東麓に沿ふて北流した幹流が九派の所謂九河となつて渤海灣に注いだのは春秋戰國の間に既に認められる所である。當時から今の山東直隸河南三省の交界地方は度々の河道の變遷を被りて宋元の間に至つた。その金の汴京に據つた頃即ち明昌五年（一一九四年）に、汴京

の西北陽武に於て決して梁山泊の邊に至つて、北清河と南清河となつて山東省内を分流し、河水の大半は東南流して淮水に入ることゝなり、元至元二十六年（一二八九年）に會通河の運河を開くに及び北清河の水は全く絶えたといふ。然るに十九世紀中葉に至り再び北清河の流路に従ひ東流することゝなつた。

春秋の時に此の三省交界地方に起つた最も有名なる戦争は晉楚爭霸戦の一たる晉文公の楚軍を破つて覇を稱した。城濮の戦でこの城濮といふ語の起源たる濮水は當時は黄河幹流の南側に之に沿ふて流れたものである。城はその北に在つたらしいが、之を今の水系に當つれば、曹州府と東明縣との間を流れる黄河幹流に一致することになる。左傳僖公二十八年の戦争の經過を記載した文を觀るに車戰にして河水が地物として何の役割をも演じて居ぬことが著しい。蓋し當時の幹流は今の衛輝府の南及び濬縣の南を経て東北流し、曹衛兩國は河南に在つたから、楚人は黄河以南の此等の國を勢力範圍に置かんとしてゐたから、南北の勢力の衝突が此處で起つたのである。

兩漢の頃と雖も此の間の幹流の位置には變化少く、大伾山の南に當る白馬津の邊は黄河渡過の要津となり、曹操と袁紹父子との交戦に於いて、その爭奪が行はれたが、今の黄河幹流は遙かにその南に徙つてしまつてゐる。

水滸傳に英雄の活躍する舞臺たる梁山泊の如き宋金元の間に在つては水運の樞要の位置に當つてゐたが、その後幹流は更に南に徙つてしまつて、地形が變化したから明清以後にはその意義はなくなつた。

日本に於いて伊太利北部の地勢に比較し得るのは利根川の中流及び上流の地方にして、東西に流れる幹流と北から之に合流する支流との脈絡の形狀は頗る之に類似してゐる。佐野足利桐生大間々等の諸邑は何れも北方から平野に向つて開いた豁谷の口に位し、就中前橋と高崎の兩市は越後と信濃に通ずる樞要の地點であつて、古の國府の遺址は前橋の西郊に在る。戰國時代に至り上杉氏の關東管領として勢力が失墜した頃に至つても、此の地方は越後と關東とを連絡するに役立つた。而して此の時に於いて軍事上に最も光輝ある記録を残したのは高崎の西北に在る榛名山裾野の箕輪城である。

上杉氏は北條武田等の諸大名の壓迫に堪えずして越後長尾氏に依るに及んで、上州諸城主と連衡して武田氏に抵抗した長野業政は此の城を根據として周邊の諸城と相呼應して信玄の侵略を防ぎ、支持十數年の後病死して子の業盛が代つた後に終に陥落し上州の大部分は武田氏の占領に歸した。織田氏が武田氏を亡した後には瀧川一益が此處に來つて上杉北條に對抗し、北條氏滅んで徳川氏の江戸入府に當り、井伊直政が箕輪に來り、續いて高崎城に遷つた。織徳兩氏の此の地區を此の如く重要視したのも清水碓氷兩峠を経て越後信濃に通ずる交通の中樞たる地區であるからである。